

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463508

研究課題名(和文) 出産女性を支援する助産師の共感疲労の実態とメンタルヘルスへの影響

研究課題名(英文) Compassion fatigue and effects upon midwives providing childbirth care

研究代表者

伊藤 道子 (ITO, MICHIKO)

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：50341681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、出産女性を支援する助産師の共感疲労の実態を把握することである。北海道の分娩取扱い施設に勤務する助産師を対象とし、42施設(42.9%)より研究協力の同意を得て自記式質問紙調査を実施した。回収した290名中、共感疲労を経験したことがある180名(62.1%)のうち、IES-Rの無回答者を除いた172名を分析対象とした。IES-R得点は平均16.6点(標準偏差14.2)であり、カットオフ値25点を超えている人は49名(28.5%)であった。重回帰分析によりIES-R得点に関連がみられたのは、流産女性への支援経験頻度、他者への情動発散、視点の転換、役職の4項目であった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to evaluate the prevalence and factors associated with compassion fatigue upon midwives providing childbirth care. The study was a cross-sectional survey involving midwives who deal with childbirth from hospitals and clinics in Hokkaido. 31 hospitals and 11 clinics(42.9%) agreed to participate in this study. The sample consisted of 172 midwives who completed the questionnaires. The Impact of Event Scale-Revised(IES-R) was used to evaluate compassion fatigue. 28.5% of midwives reported high to severe compassion fatigue. Multiple regression analysis revealed that variables correlated with IES-R included frequency of witnessed miscarriage, emotional expression involving others, changing a point of view and duty position. The findings suggest that midwives providing childbirth care may be at risk of highly experiencing compassion fatigue.

研究分野：医歯薬学

キーワード：共感疲労 助産師

1. 研究開始当初の背景

昨今、大規模自然災害や人為災害が相次いで発生している。1995年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件は、外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder; PTSD) の概念をわが国に広めた。加えて、2011年の東日本大震災では、外傷を負ったことのある、または外傷に耐えている患者・家族を支援する援助職が、強い恐怖感や無力感を伴う経験をするとような外傷後ストレス障害と同じ症状を現すことが知られるようになった。

このような現象を Figley (1995) は共感疲労と呼び、「外傷を受けた人を助ける、あるいは助けようとする結果として生ずるストレス」と定義している。看護職は、人々が病気を予防し、治療し、管理することで身体的な健康状態を保つプロセスに関わるのみでなく、人間を身体的存在、心的存在、社会的存在である全体的な存在と理解し、相互に関係を築きながら健康に寄与することを目指している。他者の情緒的ニードに応じるには、看護職自身の情緒的な関与を必要とし、苦痛・痛みを経験した人、または経験したことのある人々への支援は、対人援助専門職に外傷性ストレス反応を生じさせる可能性があることが認識されている。

陣痛中・出産中の女性は、陣痛の持続に伴い自己の意識が深く変化する状態にあるため、非常に傷つきやすい (Talor, 1995)。また、出産女性の約30%が出産による外傷経験から生ずる外傷性ストレス症状を現し、2~6%の女性が出産後に外傷後ストレス障害に進展していることが報告されている (Olde et al., 2006)。また、出産後の不安障害は、産後うつ病に比べてより多く発症していることも報告されている (Ayer et al., 2008)。海外では、出産に伴うストレス反応について研究が行われているが、わが国では産後うつ病の罹患率のみが調査されている。

助産師は、このような外傷的出産により傷ついた経験をもつ女性と関わる際には、情緒的ストレス反応である共感疲労を生じていることが予測される。しかし、欧米を中心に看護師の共感疲労についての研究は行われているものの、助産師の共感疲労の研究は国内外を通じても少ないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、出産女性を支援する助産師の共感疲労の実態を把握することである。

3. 研究の方法

(1) 質問紙調査の準備として、国内・国外における助産師の共感疲労に関する先行研究で用いられた測定尺度、質問紙項目を概観する。

(2) 質問紙の構成、および助産師の共感疲労経験を記述するための研究の問いを検討する目的で、予備調査としてフォーカス・グループインタビューを実施する。

(3) 質問紙調査とインタビューを実施する。

研究対象者

a. 質問紙調査

北海道内の分娩取扱い施設に勤務し、日常的に出産女性を支援している助産師約200名。

b. インタビュー

出産女性への支援で共感疲労を経験した助産師約10名。

データ収集方法

a. 質問紙調査

北海道内の分娩取扱い施設の看護部長宛に研究協力依頼状を送付し、承諾が得られた施設に助産師の人数分の研究協力依頼文、調査票、返信用封筒のセットを送付し、看護部長を通して配布を依頼する。調査票は、共感疲労を経験した出来事、改訂出来事インパクト尺度日本語版 (Asukai, 2002、以下 IES-R)、勤労者のためのコーピング特性簡易評価尺度 (影山, 2005)、看護師レジリエ

ンス尺度 (Ihara, 2010)、対象者の基本的属性の質問項目で構成する。

b. インタビュー

質問紙調査の最終頁で、出産女性への支援で共感疲労を経験した助産師にインタビューを実施したいため研究参加者を募集していることを記載し、研究参加への意向を尋ねる。参加を検討したい場合は、連絡先を記述してもらおう。

インタビューは、同意が得られた研究参加者へ連絡をして、都合のよい日時、場所を調整して実施する。インタビュー内容は、「外傷的出産となった女性への支援中に経験した知覚、感情」「外傷的出産となった女性への支援後に経験した知覚、感情」「専門職としてのキャリアの変化」「助産師が外傷的出産に関わることへの考え」とする。インタビューガイドに基づき、対話の中で助産師の語りたことの意図を文脈でとらえながら聴く。インタビュー時間は、1回につき1時間程度とする。研究参加者に承諾を得た上で、ICレコーダーを使用してインタビュー内容を録音し、また、大切なことを聞き逃さないようにメモを取りながら経験を聴く。

分析方法

a. 質問紙調査

質問項目の記述統計分析を行う。質問項目の記述統計を実施した後、順序変数間の関連は Spearman の順位相関係数、連続変数間の関連は Pearson の相関係数により検討し、IES-R 得点を従属変数として変数増減法による重回帰分析を行う。統計解析は SPSS Version23.0 を使用し、有意水準を 5% とする。

b. インタビュー

インタビューを逐語記録に起こしテキストを作成する。研究参加者の経験をテキストから読み取り、意味の構成単位を取り出して何のテーマについて語っているのか名前をつける。テキストの全体解釈を行うためにテ

キスト全体を再度読み返し、部分と全体を考えながらテーマについてわかったことを記述する。

4. 研究成果

(1) オンラインデータベース『CINAL』『PubMed』『PsycINFO』『Scopus』を用い、1980年から2013年までを検索年度とし、共感疲労に関して‘secondary traumatic stress’、‘compassion fatigue’、‘vicarious traumatization’、出産ケアに関して‘birth’、‘childbirth’、‘care’、‘midwife’、‘midwifery’をキーワードとして用いて絞り込んだ。総説および人工妊娠中絶をする女性のケア、助産学生が研究対象である論文を除いた結果、9件の論文が抽出された。

論文の掲載は2010年1件、2011年2件、2012年2件、2013年4件であり、2009年以前の論文は存在しなかった。研究方法は、量的研究3件(準実験研究1件を含む)、質的研究5件、混合法研究1件であった。量的研究で用いられた測定尺度は、Secondary Traumatic Scale (Brade et al., 2004) 1件、ProQOL (Stamm, 2010) および IES (Horowitz et al., 1979) 1件、日本版 ProQOL (Fujioka, 2011) および日本版感情労働尺度 (Ogino, 2004) 1件、日本版 IES-R (Asukai, 2003) 1件であった。デモグラフィックデータと共感疲労との関連を調査した論文は2件あり、臨床経験年数、年齢、職位、勤務体制などを尋ねていた。短い臨床経験年数は、2件中1件で統計解析により有意差が認められた要因であった。他のデモグラフィックデータは、有意差が認められなかった。

(2) グループインタビューへは、研究課題に関心をもち音声データとして録音することを承諾した3施設7名の看護職が参加した。助産師として就業している看護職6名のう

ち、3名は看護管理者であった。インタビューでは、最初に「出産によって傷ついた人を実際に助けたり、助けようとした結果、助産師がストレス反応を示していると認識した出来事を目撃したり、相談されたり、あるいは自分自身が経験されたことがありますか。」「それは、どのような出来事でしたか。何がそこで起こっていましたか。」「その事態に対して、どのような行動をとりましたか。」「経験したご自身はどのような気持ち・感情でしたか。」「このような出来事を助産師が経験することに関してどのような意見をもっていますか。」と尋ねた後、参加者に自由に語ってもらうように奨めた。3名の助産師が外傷的出産を目撃し携わった経験を語った。その出来事は、分娩第1期の遷延分娩、骨盤位破水後の臍帯脱出による死産、早産後の新生児死亡であり、2名の助産師は外傷経験から間もなく、自分の行為に対して強い後悔の感情を表していた。

看護管理者からは、急変した新生児への対応に対する後悔から離職した助産師に携わった経験、助産師と医師の協働ができていないことにより緊急を要する対処ができなかった経験の語りがあった。これらは、海外の先行研究 (Beck et al., 2015) の研究結果の一部と合致していることが示唆された。

(3) 42施設 (42.9%) より研究協力の同意を得て自記式質問紙調査を実施した。

調査対象者 290名中、共感疲労を経験したことがある 180名 (62.1%) のうち、IES-Rの無回答者を除いた 172名を分析対象とした。IES-R得点は平均 16.6点 (標準偏差 14.2) であり、カットオフ値 25点を超えている人は 49名 (28.5%) であった。重回帰分析により IES-R得点に関連がみられたのは、流産女性への支援経験頻度、他者への情動発散、役職、視点の転換の 4項目であった (表 1)。

本研究の結果は、海外の先行研究 (Beck et al., 2015) の研究結果と一部合致しており、出産女性を支援する助産師が強い共感疲労経験のリスクを保有している可能性を示した。

表1 IES-R得点の重回帰分析

変数	標準偏回帰係数 ¹⁾	多重比較 ²⁾⁴⁾
レジリエンス		
対人スキル	-0.153 †	
コーピング特性		
他者への情動発散	0.222 ***	
視点の転換	-0.186 *	
属性		
役職 ²⁾	0.194 *	
共感疲労の経験		
流産女性への支援経験頻度 ³⁾		
i) ほとんど毎日～週に1～2回	0.298 ***	ii) iii) iv) と有意差*
ii) 月に1～2回～半年に1～2回	0.195 *	i) と有意差*
iii) 今までに1回	0.089	i) と有意差*
iv) 経験していない	0	i) と有意差*
妊婦の急変のストレス強度 ³⁾		
強い	0.102	
弱い	-0.016	
経験していない	0	
調整済みR2乗	0.272	
F値 (有意確率)	6.155 (0.000)	

1) F検定 *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001, †p<0.1

2) 「役職なし」を基準カテゴリーとしてダミー変数化

3) 「経験していない」を基準カテゴリーとしてダミー変数化

4) 流産女性への支援経験頻度をカテゴリー変数とした共分散分析にBonferroniの方法を適用した

インタビューは、研究参加への同意が得られた7名の助産師へ実施した。分娩時大量出血のため他施設へ搬送された女性との関わり、若年女性の出産、新生児死亡、死産の支援での経験が語られた。出産により傷ついた女性を支援した助産師も外傷性ストレスを強く知覚していた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

伊藤道子、ナラティブからひも解くバースレビュー - 時間を置いて語られた前

回出産への否定的認識、助産雑誌、査読無、
Vol69、2015、pp.994-997

〔学会発表〕(計1件)

加藤康子、伊藤道子、里帰り分娩をする
女性に対する市町村保健師の支援の実態、第
65回北海道公衆衛生学会、2013年11月14
日、札幌市生涯学習センターちえりあ(札幌
市)

〔図書〕(計1件)

監訳：大久保功子、宮坂道夫 翻訳担当
者：大久保功子、伊藤道子 他、クオリティ
ケア、人間科学のためのナラティブ研究法、
2014、393(343-378)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 道子(ITO MICHIKO)

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：50341681